

先週の福音書は、フィリポとナタナエルというふたりの人がイエス様の弟子になる話でしたが、今日は、ガリラヤ湖で漁師をしていた、シモンとシモンの兄弟アンデレ、そしてゼバダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネがイエス様の弟子になったお話です。シモンというのは、ペトロのことですね。イエス様の十二弟子の中には、熱心党のシモンという人もいますが、これは今日のシモンとは違います。シモンという名前の人は多かったのですが、イエス様は漁師のシモンにペトロというギリシャ語のあだ名をつけて、彼のことを岩と呼ばれたのでした。

マルコによる福音書は、ルカによる福音書に出てくるような、イエス様の指示によって網を降ろしたらたくさん魚が捕れたような奇跡物語はありません。ついでに言うと、マタイにもその奇跡は書かれていません。これがヨハネの場合は、弟子になる時ではなく、イエス様が復活した後、最後の21章で、弟子たちがガリラヤに帰っていた時、イエス様がそこに現れて、舟の右側に網を打つように言うと、たくさん魚が取れて、一緒に朝の食事をする、という話になっています。

ルカやヨハネの福音書は、それぞれその奇跡物語で、言いたいことがあったのでしょうか。

それでは、このマルコによる福音書で、物語がタンタンと進む四人の漁師を弟子にする話の中から、私たちは何を学んだらいいのでしょうか。

わたしは、イエス様が言われた「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」という言葉に注目したいと思います。みなさんは、このイエス様の言葉が、それより600年も前に預言者の口から出てきた言葉だということをご存知でしょうか。

エレミヤ書第16章16節から18節

『見よ、わたしは多くの漁師を遣わして、彼らを釣り上げさせる、と主は言われる。その後、わたしは多くの狩人を遣わして、すべての山、すべての丘、岩の裂け目から、彼らを狩り出させる。わたしの目は、彼らのすべての道に注がれている。彼らはわたしの前から身を隠すこともできず、その悪をわたしの目から隠すこともできない。まず、わたしは彼らの罪と悪を二倍にして報いる。彼らがわたしの地を、憎むべきものの死体で汚し、わたしの嗣業を忌むべきもので満たしたからだ。』

エレミヤは、紀元前587年にエルサレムの都が東の国バビロニアによって滅ぼされるのを目撃した預言者です。神様はイスラエルの人々が神様に逆らって生きている罪を裁くために、敵軍であるバビロニアを使って、ちょうど漁師が魚を釣り上げるように、イスラエルの人々を捕獲される、と言っているのです。

ですから、エレミヤは裁きのために人間をとる漁師が遣わされる、と言うのですが、イエス様の場合は救いのために人間をとる漁師にするため、弟子たちを集められる、というわけです。今日の福音書については、それぐらいにして、以前私が伝道部だった頃、学んだことを改めて考えたいと思います。

7年前、私は伝道部になり、アメリカの南部バプテスト教会の牧師であるリック・ウォーレンという人が書いた、「5つの目的が教会を動かす」という本を課題図書にして、勉強を始めました。

この5つの目的とは、

- ①心を尽くして主を愛すること。 その具体的な方法として、私たちは礼拝をしているのです。
- ②自分のように隣人を愛すること。 人々への奉仕のために教会は存在する。ところが多くの教会は、本当に奉仕と呼べるものをわずかしかなかしない。奉仕の働きではなく、集会出席によって、信仰深さが図られることが多い。教会員は椅子を温めるだけで、時間ばかりが過ぎてゆく。
- ③行って弟子をつくること。これが「伝道」ということで、行くところどこでも、福音を分かち合い、キリストの降誕、十字架上の死、復活、再臨の約束を世界に伝えなければならない。
- ④洗礼を受けること。キリストのからだとして、新しく交わりに加わる人が必要になる。
- ⑤従うように教えること。 これは「弟子訓練」と言われます。ただ洗礼を受けるだけでなく、その人がキリストを伝える弟子になることが大切だということです。

これらの目的の中で、1番の礼拝とか、4番の教会に来始めた人に洗礼を受けるとか、5番の弟子訓練というのは教区では教育部の守備範囲です。そして2番の奉仕と3番の伝道が、伝道部の仕事ということになります。ただ、2番の奉仕の方は、伝道部の優先課題にはならず、まずは、教会に来ていない周囲の人々を教会に来てもらうために、どうするか、その方法を考えるのが、その時の伝道部の課題のように思えました。というのは、先ず地域の人々を教会に招き、彼らに洗礼を受け、そののち、信仰を一層深めて、クリスチャンとしての価値観を十分に持ったうえで、社会への奉仕、社会問題への取り組みが可能になるのであって、それがなければ、社会の中の政治運動に巻き込まれるだけで、クリスチャンとしての奉仕とは言えないものになってしまう危険があるからです。それで、6年前、伝道部の課題のために、この本の11章「戦略を開発する」という部分を学ぼう、ということにしました。

この章を始めるにあたり、著者のリックさんは2つの聖句を挙げています。

Iコリント9：22～23『弱い人に対しては、弱い人になりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。』

マタイ4：19『イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。』

二番目は、今日の福音書と共通する、マタイの方の聖句です。

さて、この章でリックさんは、彼とお父さんが釣りに行った時、お父さんは釣りの名人で、次々と魚を釣り上げるけど、自分はさっぱり釣れないので、その違いを考えたそうです。お父さんは魚の習性をよく知っていて、どんな魚はどこにいて、いつ頃餌を食べようとするのかよく知っている。そして魚を取るためには、はいずりまわったり、腰まで水に浸かったりして魚をとろうとするけど、自分は居心地の良い場所で釣り糸を垂らした、というのです。

不幸にも、多くの教会は人をすなだめるのに、これと同じような活力を欠いたやり方をしている。伝道をしようとする相手を理解する時間をとることも、戦略を持つこともない。できるだけ居ごこちの良い状態のままで人をすなだめることを望んでいる。でもイエス様は、何を語るべきかだけでなく、どのように伝えるべきかをも、教えてくださっている。マタイとルカの10章にそれが書かれている、といえます。

マタイの10章には「十二人を派遣する」、ルカの10章には「七十二人を派遣する」話が登場します。特にユダヤ人のために書かれたマタイの方では、「異邦人の道に行ってはいけない。また、サマリア人の町に入ってはならない。むしろ、イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。」と言われます。これはイエス様がほかの民族に対して偏見を持っていたのではなく、弟子たちが最も伝道しやすい人々、彼ら自身と似ている人々を対象にした。イエス様は、相手を排除するのではなく、効果的に伝道するために対象を特定された、ということだと著者は解説しています。

そして、自分たちを受け入れる人を相手にするのであって、受け入れる気のない人に何度も戸を叩くのは、時間の無駄である、と言います。このことを著者は魚釣りにたとえて「釣ろうとしている相手を知る」「魚が食いつく場所に行く」などと言います。

そして、それに続く著者の主張には「魚のように考えることを学ぶ」「魚を彼らのことばで釣り上げる」「複数の釣り針を使う」「地域に伝道するにはお金がかかる」「魚釣りは真剣な仕事である」という言葉が続きます。

教会に集まるクリスチャンは、クリスチャン同士の関心や言葉などを話すようになって、伝道のために関わらなければならない人々、釣り上げる魚である、教会の周りの人々に届くような方法を忘れていないか。そのためには、常にクリスチャンではない人々を友達に持ち、その人たちが、どんなことに関心を持ち、教会にどんなイメージをもっているか、知っておく必要があるというわけです。

著者が教会を始めるにあたり、町の人々に聞き取り調査をしたときに、基本的不平が四つあると言っています。

①教会、とりわけ説教は退屈である。その内容は私の生活と関係がない。

最も刺激的な書物である聖書を取り上げて、人をうんざりさせることのできる教会の技量には、驚かされる。多くの教会は、パンを石に変える奇跡を行っているのである。

②教会は、来た人に不親切である。教会に行ったなら、邪魔者扱いでなく歓迎されていると感じたい。教会用語や讃美歌や進行がわからないので、みじめになり、教会員たちから裁きの目で見られているように感じた。来会者が監視されていると感じないで、歓迎されていると感じるように努めること。

③教会は、私より私のお金に関心があるのだ。未信者は献金のアピールに神経質になっている。著者の教会は献金の際、献金しなくてもよいと告げることで対処した。献金は教会に加入している人のためであることを説明する。

④教会は子どもの面倒をきちんと見てくれるかどうか心配だ。

若い夫婦に伝道しようと思うなら、彼らの子どものために優れたプログラムを用意しなければならない。

わたしたちは、教会に新しい人が来ることを期待しているのですが、そのためには、来てほしい人が何を求めているのか、それを探り、それに応えられる私たちにならなければ、魚釣りは成功しないのではないか。もっと一歩も二歩も教会から出て行って、人々が教会に信頼をおいて入ってくるができるように努力する必要があるように思うのです。コロナがほぼ克服され、先日のクリスマスには久しぶりに愛餐会をしました。私たちの教会生活をもう一度点検し、新しい可能性を探すことに挑戦してみましよう。